



悪性胸膜中皮腫

(あくせいきょうまくちゅうひしゅ)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

悪性胸膜中皮腫について

胸部の肺、あるいは心臓などの臓器や胃腸、肝臓などの腹部臓器は、それぞれ胸膜・心膜・腹膜という膜で包まれています。これらの膜の表面をおおっているのが「中皮（ちゅうひ）」で、この中皮から発生した腫瘍を中皮腫といいます。したがって中皮腫は、その発生部位によって胸膜中皮腫・心膜中皮腫・腹膜中皮腫などに分けられます。

症状および診断について

悪性胸膜中皮腫では、胸痛、咳（せき）、大量の胸水による呼吸困難や胸部圧迫感が起こります、また、原因不明の発熱や体重減少がみられるときもありますが、これらは中皮腫に特徴的な症状とはいええず、早期発見が難しい病気です。肺がんとの鑑別が難しい場合も多く、胸に針を刺して胸水中の腫瘍細胞を調べたり、局所麻酔下あるいは全身麻酔下での生検（組織採取）で胸膜面の腫瘍を十分に採取して調べたりする必要があります。

治療について

悪性胸膜中皮腫は非常に治りにくい難しい病気の1つです。治療法には、外科療法（手術）、放射線療法、抗がん剤治療（細胞傷害性抗がん薬や免疫療法）および対症療法などがあります。どのような治療法を行うかは、病状（病期）や全身状態により決定されます。

悪性胸膜中皮腫は、胸膜の肥厚や多数のしこりとして発見されるため、外科療法の適応になることは少なく、多くの場合、薬物療法（抗がん剤治療）の治療が最善となります。放射線療法は、（1）胸膜病巣による痛み（胸痛、背部痛など）の緩和、（2）骨、脳などの遠隔転移病巣の制御などで用いられることが多く、応急処置的・緩和的位置づけとして重要な治療手段となっています。

